托鉢（たくはつ）（注）の里づくり

（提案趣旨）

若者が一生に一度托鉢生活をする場の建設。寺院や地域住民の協力で、宿を提供し、先輩僧が教えを垂れ、住民が食を与える。若者は道普請などで地域貢献し心の開発を行う。

（本文）

過剰なまでの物質的豊富さ、その裏腹にある精神の貧困と荒廃。人生の生きる意味を見失った若人、生きがいを見出せず苦吟する人びと。さらには人を殺してみたくなった男…。この社会病理の裏で、足ること、恵まれていることを知ることは大切です。一生に一度、トコロテンシステムからはみ出して、托鉢生活を行ってみては？

タイでは早朝、僧の姿をした若者達を見かけますが、この時期だけは職場や学校から隔離されて乞食の生活を行い、自分の何たるかを学びます。このことは、タイの男性だれもが一度は経験するものと考えられていますから、社会一般から暖かく迎えられ、托鉢にも暖かい手を差し伸べられます。

同様の「托鉢の里」を興したらどうでしょうか。しかし、日本社会には受け入れ体制はありません。まずはその価値を認め、意義を普及して社会的に認知していただくことが必要です。つぎに、托鉢を受け入れる諸条件、すなわち、宿舎、勤労（野良作業や道普請）、托鉢、勉学など、一連の制度が整うことが必要です。神社、仏閣、寺院並びに地域住民の協力が不可欠です。場所としては、８８箇所めぐりを持つ町などが思い浮かびますが、風土性豊かな田舎がいいように思われます。朝夕乞食をするのに不可欠な、人情味ある住民のあたたかい励ましや協力が得られると思うからです。

イメージは次のとおりです。

１．若者は、一定期間の休暇をとり、「托鉢の里」の民家や寺院に投宿。
２．拠点となる教会、寺院等に集合し、托鉢をする。
３．勤労の義務を果たしながら勉強などをする。
４．研修所（道場）にて教育者（説法者）が指導する。

悩む若人が再び自信と希望を取り戻し、一方で、足ることを知る哲学を学ぶ。その地は彼にとって生涯忘れえぬ里となり、一方、学びそのものが、個人を超えた社会共有の財産となり、いずれは大きく日本社会に帰ってくることでしょう。

注：托鉢　修行僧が、各戸で施与する米銭を鉄鉢で受けてまわること。乞食。（広辞苑）